

日本社会福祉学会第61回秋季大会報告

第61回秋季大会事務局長 岡田 直人（北星学園大学）

日本社会福祉学会第61回秋季大会は、秋の3連休の前半となる2013年9月21日（土）9時から22日（日）12時までの1日半のコンパクト大会として、札幌の北星学園大学において開催されました。大会の2日間は天候に恵まれましたが、本州から来られた会員の皆様にとっては、きっと肌寒いと感じられるくらいの気温だったことでしょう。日本社会福祉学会の大会回数を人の年齢で例えれば、還暦となる記念すべき第61回秋季大会を北星学園大学で開催し、全国から皆様をお迎えできたことは開催校スタッフ一同、とても嬉しいことでした。

大会テーマは、「貧困と社会福祉—貧困問題への創造的実践を考える」でした。小泉内閣やリーマンショック以降、日本では貧困の問題がたびたび話題となりましたが、日本社会福祉学会秋季大会において、貧困が大会テーマとなるのは第1回大会以降初めてのことです。一方で、貧困を大会テーマとして取り上げるとしても、貧困問題に対する制度政策やその対象者を単に取り上げるのではなく、何か別の視点から見ることはできないかと考え、NPO等が行う創造的実践について取り上げることになりました。

大会校企画シンポジウムでは、基調講演で社会活動家の湯浅誠氏から「格差・貧困問題と民主主義」と題して、無縁や孤族など制度に照らされない人を効率的に支援に結びつけ、放置させることによる支援コスト増大を防ぐため、パーソナル・サポートとして「気遣い人」の機能をもつ社会サービスを構築する必要性についてお話しいただきました。シンポジストには、本学の卒業生でもあり北海道で活躍されている釧路社会的企業創造協議会の櫛部武俊氏、そしてほっとプラスの藤田孝典氏、本学の木下武徳会員にお願いしました。櫛部氏からは、居場所づくりから地域づくりへの試みとして、生活保護受給世帯の社会的自立と日常生活の自立を促すため、社会的企業として多様な働き方による新たな地域モデルを構築し、中間的就労から社会的企業としてのスモールビジネスを起し、地域と協働できる体制づくりの実践を紹介いただきました。藤田氏からは、社会福祉から「漏れ」続ける対象者とケア不在の福祉現場の現状の指摘があり、貧困問題に対する社会福祉学およびソーシャルワークの可能性についてお話しいただきました。木下会員からは、これまでの貧困へのアプローチの限界について指摘があり、生活困窮者をめぐる法・制度の新たな動きを紹介し、これからの貧困領域における「創造的実践」とその展開についての提案をいただきました。

大会校企画シンポジウムに先駆けて、大会初日の午前には、若手研究者のためのワークショップ「質的調査と量的調査を組み合わせた研究ワークショップ—トライアンギュレーション手法について—」が行われました。これまでの大会では、質的研究と量的研究について別々にワークショップが企画されてきたため、今回の企画では、どちらも聞きたい人、

両方を併せた研究法を学びたい人のために考えてみました。講師には山崎喜比古会員（日本福祉大学）、小澤温会員（筑波大学）、報告者には横山由香里会員（岩手医科大学）、倉持香苗会員（日本福祉大学）にお願いしました。始めに山崎会員からトライアングレーション手法について解説をしていただき、その後、横山会員から「Mixed Methods を用いた研究の紹介」、倉持会員から「『地域拠点としてのコミュニティカフェ』に関する量的調査と質的調査を組み合わせた研究の紹介」をいただき、小澤会員から 2 人の若手研究者からの報告へのコメントをいただきました。詳しくは、本学会 HP にある第 61 回秋季大会開催校企画資料をご参照ください。

学会本部主催の国際学術シンポジウムは、「災害における危機管理と地域福祉」というテーマで大会 2 日目に開催されました。日本、韓国、中国から計 5 名のシンポジストがテーマに関して、各国の取り組みと課題について意見交換を行いました。

以上、3つのプログラムについては、本学でもっとも広い図書館本館 4 階の教室で行われ、いずれも 300~400 名程度の参加者があり、参加者からも好評をいただき、開催校として胸をなで下ろしました。

研究発表では、口頭発表では 15 領域 42 分科会 200 演題、特定課題セッションでは 3 セッション 10 演題、ポスター発表では 80 演題の報告があり、各会場で活発な研究討議がなされました。

大会初日夜の情報交換会では、地元の新進気鋭の料理人 **FIRST CHEF** の貴田岡憲一さんをお願いし、「オール北海道」をテーマとして料理と飲み物をご用意しました。少しこだわりを入れた企画であったため、150 人定員とさせていただき、当日参加を希望された会員のなかには、お断りしないといけなかった方が少なからずいたため、この場をお借りして改めてお詫び申し上げます。情報交換会自体は、味の評価が高い道産ワインに合うように一口サイズの料理の組み合わせを用意し、各テーブルのデコレーションにも意匠を凝らしたことで、おおむね参加者から好評でした。

大会参加者は、事前の予想では、第 61 回大会においても、過去 3 回の大会と同様に 1,000 名を超えると見込み、資料等の準備では 1,200 名分を用意しておりましたが、結果的に 48 名の欠席者が生じ、また当日参加者が 205 名と例年より 100 名減となり、参加者合計が 893 名と 900 名にも届きませんでした。参加者減となった背景には、開催時期が例年より 1 ヶ月早まったことにより、夏休み中の社会福祉士養成のための実習巡回および帰校日対応があったため、各種入試日と重なったため、同日期間中に札幌市内で別の学会開催があり宿泊施設および航空券の手配が著しく困難になったためと推測されます。

最後に、大会全体を通じて、事前の案内や準備で行き届かなかったところがあったかと思いますが、岩田正美会長をはじめとする学会理事や事務局のみなさま、また、司会者や全体統括者、シンポジスト、発表者として参加された会員のみなさまのご協力により、大会を無事終了することができました。この場をお借りして、御礼申し上げます。ありがとうございました。